

[シリーズ]

PISA型読解力 について考える

第7回

英語の授業を通じて クリティカル・リーディングと ロジカル・ライティングを育成

長崎日本大学高等学校

長崎日本大学高等学校は、2006年度に文部科学省のスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール（以下、SELHi）に指定され、英語科においてPISAが求める「文章を批判的に読む力」と「客観的根拠を挙げて論理的に自分の意見を表現する力」に共通する能力の育成を行った。同校の取り組みについて、梅本博教頭と英語科教諭の室屋精一郎先生に話を伺った。

● 通常の英語の授業の中で ● 論理的思考力の育成法を模索

長崎日本大学高等学校は、SELHiとして3年間にわたり「クリティカル・リーディングからロジカル・ライティングへと導くための指導法と評価法の研究開発」を行った。梅本教頭は研究課題設定の理由を、「本校の特徴となるような教育を開発したいと思い、日本人に不足していると言われる論理的思考力を、英語教育を通して育成する方法の研究開発に取り組むことにしたのです。また論理的思考力だけではなく、英語の長文を的確に読むためにも、クリティカルに読むことに取り組む。さらに、英文をクリティカルに読み、論理的思考力を使って英文で表現することを到達点として、ロジカル・ライティングも目標にしました」と説明する。

しかし、同校を含むこれまでの日本の中学校・高校の英語教育では、文法解説、訳読式の英文解説、和文英訳が中心であり、論理的思考力や論理的に文章を書く力を育成する手法は確立されていなかった。

そこで、研究開発の指導・助言、評価・監督をする組織を作り、委員として、日本大学川島彪秀名誉教授、大妻女



梅本博教頭



室屋精一郎先生

子大学服部孝彦教授、長崎大学松元浩一准教授、広島大学大学院池野範男教授を迎えた。

校内で中心となったのは、英語科の梅本教頭、室屋先生、宮口匠邦先生と、英語ネイティブスピーカーのALT^(注1) 3名を加えた6名である。他の英語科の先生は、授業参観などを通し、取り入れられる点を適宜自分の授業に導入した。

研究は、SELHi指定初年度（2006年度）入学の普通科10クラスの生徒387名を対象に「英語Ⅰ」「リスニング」の時間で行った。以降、その生徒たちが2年次になった時に「英語Ⅱ」「リスニング」を、3年次では「リーディング」「リスニング」の時間をこの取り組みに当てた。

教材は教科書だけでなく、リーディングとライティングの参考書とワークシートを作成した。独自の教材を作成した理由について、室屋先生は「当初、教科書のみを用いるつもりでしたが、1年目を終えてみると、教科書は文章が短く論理的なパラグラフ展開がなされていないなど、今回の目的に適さないものが多いことがわかりました。2年目から速読を導入したかったため、パラグラフ構成のしっかりした文章を英字新聞や雑誌などから探して冊子やワークシートを作り、教科書と併用しました」と説明する。

● クリティカル・リーディングと ● ロジカル・ライティングの参考書を独自に作成

まず、1年次の授業では、「クリティカル・リーディングとロジカル・ライティング」の参考書【資料1】を配布した。クリティカル・リーディングとは「文章はただ読むのではなく、書き手の言いたいことを的確に理解しながら、自分の知識や価値観と照らし合わせながら読む。そして時

(注1) Assistant Language Teacher

には、書き手の主張に意見する」こと。そのためのポイントとして、6つを示した。

- ① 事実を読み取る
- ② 理由を考える
- ③ 内容を考える
- ④ 批判的に文章を読む
- ⑤ 情報を応用して読み解く
- ⑥ 読後感を述べる

参考書では、この6点について桃太郎の例を挙げながら、例えば、ポイント①では5W1Hを念頭に置き、桃太郎はどこへ行ったのか、鬼と戦ってどうなったのかなどを意識しながら読むことだ、と説明している。

ロジカル・ライティングとは、ロジカルな文章には「型」と「内容」の両者が必要であること。「型」としては、1つの段落には最初にトピックセンテンスがあり、次にその内容をサポートする文が続くこと。文章は、何について述べる文章かを示す「イントロダクション」の段落、文章のメインであり具体例などを示す「ボディ」の段落、文章のまとめとなる「コンクルージョン」の段落からなること、と説明している。「内容」としては、首尾一貫している必要があることなどを説明している。

教科書を逐語訳せず クリティカルに読む力を育成

各単元ではテキストは逐語訳せず、前述した①～⑥のポイントやパラグラフのトピックセンテンス、パラグラフ構成を意識しながら時間内で黙読して内容を把握し、次に、テキストの内容や筆者の主張に関する問いに答えさせたりしている。他にも、パラグラフの文章の一部を切り取った問題を出題し、生徒に文脈からそれぞれの空欄に適する文章を選択肢から選ばせる問題を出題するなどして、クリティカル・リーディングや論理的思考力を育成した。

さらに、単元ごとに必ずテキストの内容に関連するテーマについて生徒に自分の意見を書かせて、論理的に書く力の育成につなげている。

例えば、1年次に「マコトがイギリスの湖水地方を訪れ、美しい自然景観や、ピーターラビットの著者であるビアトリクス・ポターの家が当時のまま保存されていることを知ったのをきっかけに、ホテルのオーナーたちとナショナルトラストについて話をした」という内容のテキストを読んだ際には、ワークシートの、

【資料1】「クリティカル・リーディングとロジカル・ライティング」の参考書より

「クリティカル・リーディング」の実践

では、「文章はただ読むのではなく、書き手の言いたいことを的確に理解しながら、自分の知識や価値観と照らし合わせ、考えながら読む。そして時には、書き手の主張に意見する。」という読み方をどのように行えばよいのでしょうか。

ここで読者（皆さん）が効率的にクリティカル・リーディングを行うためのポイントを示したいと思います。以下に示すポイントが自分が読む活動を行うときに実行できれば、非常に高度な“読み”の活動ができていると考えてもらって結構です。わかりやすいように、日本の昔話である「桃太郎」を用いながら説明します。

ポイント① 事実を読み取る

《文章に書かれている事実関係をしっかりと理解・把握するように努めましょう》

桃太郎の場合、次のような問いかけを自分にできれば良いわけです。

- ・ 「桃太郎」では、誰が桃を拾いましたか？
- ・ 桃太郎はどこに行きましたか？
- ・ 桃太郎は一人でそこへ行きましたか？
- ・ 桃太郎は鬼と戦い、どうなりましたか？
- ・ 桃太郎は鬼退治に何を持っていましたか？

上記の質問は、桃太郎の物語に関して事実のみを尋ねています。一人で文章を読む際にも、自分にこのような問いかけを行いながら読みましょう。英語では、常に英語で事実関係を答えられる（説明できる）ようにしましょう。

学校の調査や模擬試験、大学の入学試験などでよく問われる問題でもあります。

英語では5W1Hを使う。

ポイント② 理由を考える

《人の行動や事実として起こったことに対する理由を常に考えましょう》

次のような問いかけを自分にする。

- ・ 桃太郎はなぜ鬼退治に出かけたのでしょうか？
- ・ 桃太郎はなぜ“桃太郎”と名付けられたのでしょうか？
- ※ 桃太郎はなぜ貴重な食料を与えてまで動物たちを引き連れていったのでしょうか？

※ 実際に考えてみてください。

英語において、「Why～?」という視点。

(2006年度 SELHi 第一年次研究開発実施報告書P19より)

1. What did the people talk about in the dining room?
2. What did Makoto learn about the National Trust?

といった設問に答えることで本文の内容把握を促し、続いてナショナルトラストのモットーに関連して、同校のモットー（校訓）と、自分のモットーについて考え、英文を書かせた。なお、同校では定期テストでもクリティカル・リーディング、ロジカル・ライティングの出題をしている。

ワークシートの記入を通じて 論理的な文章作成を目指す

ライティングについては、最初からパラグラフ構成のしっかりした論理的な文章を書くのは難しいため、ワークシ



【資料2】 Logical Writingのワークシート

Logical Writing

Name: _____ No: _____ Class: _____

The topic of today's paragraph will be:

If you could change anything at this school, what would you change?

Step1: The Introduction or Opening Statement

First, we need an *Opening Statement (Introduction)* for our paragraph. Choose **one** of these opening sentences and put your three answers in the space below. You have 5 minutes.

{ A. If I could change anything at this school, I would change
B. If I had the power to change anything at this school, I would change

1. _____
2. _____
3. _____

Step2: Giving Reasons

Now that we have chosen our *Introduction* we have to give reasons for why we want to change these things. Let's think about the reasons. Don't worry about spelling or even English, even Japanese is okay. In 8 minutes, try to write down two reasons for each thing you would like to change. You have 8 minutes.

I would like to change (1. _____)

Reason1	because
Reason2	because

I would like to change (2. _____)

Reason1	because
Reason2	because

(2007年度 SELHi 第二年度研究開発実施報告書 P17より)

【資料3】 エッセイの評価ポイント

Checker→	Speaker	Listener	Score
	Key words	Points	
Topic			1 × 2
Facts			2 × 2
Opinion(Proposition)			1 × 2
Interesting?	1 2 3 4		
Useful?	1 2 3 4		
Speech	1 2 3 4		
Total Score			/20

(2008年度 SELHi 第三年度研究開発実施報告書 p25より)

ートを用いて指導をした。

例えば、If you could change anything at this school, what would you change?という問いに対して自分の意見を書く課題【資料2】では、Step1として、書き出し文を2つ示した上で、そのどちらかを生徒に選ばせ、書き出し文に続く形で変えたいと考えたことを3つ書かせる。次に、Step2として、それぞれについて理由を2つずつ考えさせ、Step3としてそれぞれの理由についてより説得力のある方がどちらかを考え、Step4としてTo begin with, Next, Finallyなどの接続詞を使いながら文章を書き、Step5として最後に結論を書くというワークシートを用いて、指導をしている。

さらに、書いた文章を隣の席の生徒と交換して、質問や

意見を書いてもらい、それを反映させた文章を再度作成して、完成度を高めた。

なお、室屋先生の授業の場合、リスニングとスピーキングの育成も同時に図るため、授業は生徒とのやりとりも含めてできる限り英語で実施。新出の単語や熟語、文法は、各単元の冒頭に日本語で解説するスタイルを取っている。

● 3年間の総仕上げとして、英文エッセイを作成

試行錯誤の中で少しずつ手法を変えながらも、3年間を通し、全ての単元で上記のような授業を繰り返した総仕上げが、200語程度の英語でのエッセイ作成である。

テーマは「The greatest invention ever」。改めてイントロダクション、ボディ、コンクルージョンのパラグラフ構成を確認した上で、ボディでは「最高の発明であることを示すための事実やエピソード」「個人的な意見・主張」など触れるべき内容を指導した。評価は、1人の教員が80人前後のエッセイを採点するため、4点満点(注2)とした。

さらに、「この授業の最後には、生徒全員が自分の書いたエッセイをクラスメイトの前で発表する機会を設けました」と室屋先生。「聴き手の生徒には評価表【資料3】を渡し、発表から“Topic”“Facts”“Opinion (Proposition)”を聴き取って記入させることで、リスニングの練習にしました。さらに、聴き手には“Interesting”“Useful”“Speech”の3点について4段階で発表を評価させました。発表者は良い評価をもらうためにわかりやすく話そうとしますから、スピーキングの練習になりました」(室屋先生)

● 達成レベル表をもとに ● 3年間で徐々にレベルアップ

一連の取り組みの評価については、3年目にこれまでの実践をもとにした達成レベル表を作成して、到達度の目標とするとともに、教員による評価や生徒の自己評価に役立てた【資料4】。

「クリティカル・リーディングの達成度1は、文章を読んで『事故の話である』などテーマがわかるレベルです。達成度2は5W1Hが読みとれるレベル。達成度3は、筆者が何を言いたいのかを読み取れるレベル。ロジカル・ライティングについては、さらに達成度4～6を設けました。1年次は自分の感想や意見が書ける達成度3に到達するのが目標、2年次では意見に根拠を付け加えられる達成度4

(注2) エッセイの評価ポイント

- ・ エッセイの中にIntroductionとして機能しているパラグラフが最初に含まれている・・・1点
- ・ エッセイの中にBodyとして機能しているパラグラフが中間に含まれている・・・1点
- ・ エッセイの中にConclusionとして機能しているパラグラフが最後に含まれている・・・1点
- ・ 全体の内容が優れている(一貫性がある、訴えるものがあるなど)・・・1点

【資料4】クリティカル・リーディング&ロジカル・ライティング自己評価表

クリティカル・リーディングに関する自己評価	
達成度1	書いてある内容が大まかに理解できる
達成度2	書かれている事実を理解している
達成度3	筆者の主張や意見がわかる

ロジカル・ライティングに関する自己評価		
	内容に関して	構成に関して
達成度1	何についての文章が大まかに書ける(言える)。	辞書や参考書を補助的に使用し、意味が通じる単文を作る事ができる。
達成度2	文章中の事実を書ける(言える)。	複数の単文で構成される文の塊を作り、まとまりのあるメッセージを伝える事ができる。
達成度3	書かれている事実や筆者の主張に対して、自分の感想や意見を書ける(言える)。	パラグラフ構成を理解し、Topic Sentence と Supporting Idea から成るパラグラフを作成する事ができる。
達成度4	書かれている事実や筆者の主張に対して、 <u>独自の理由を加えた上で</u> 感想や意見を書ける(言える)。	複数のパラグラフから成る文章を作り、まとまりのあるメッセージを伝える事ができる。
達成度5	書かれている事実や筆者の主張に対して、独自の論を展開する事ができる(筆者と異なる主張、提案など)。	Introduction, Body, Conclusionから成る文章を複数のパラグラフを用いて作る事ができる。
達成度6	達成度5の内容に誰もが信頼できる情報を付加し、より説得力のある独自の論を展開することができる。	

が目標というように徐々に力をつけていき、3年次の終わりに、達成度5や6に到達できればよいと考えています(室屋先生)

このように内容が豊富であれば、時間不足が懸念されるが、梅本教頭は、「教師も生徒の視点がわかり、生徒もワークシートの内容や形式に慣れてきたので時間はそんなにかからなくなりました」と話す一方、「クリティカル・リーディングの教え方を確立するまでが大変でした。教科書に加え参考書やワークシートなどの教材を作り、2年間の研究後、3年目で自分たちが考える流れで教えられるようになりました」と振り返る。

ところで、今回は英語科での取り組みが中心であったが、同校では、他の教科とも連携して、生徒の批判的読解力と論理的思考力を高めていきたいと考えている。そこで広島大学大学院池野範男教授の協力を得て、歴史で文字史料や絵画史料をもとに時代背景や施政者の考えを検証する授業を4回実施した。

●「全校への拡大」
●「大学入試への対応」が課題

成果については、「進学実績は本校として今までで一番良かったのですが、この取り組みとの因果関係ははっきりわかりません。しかし、研究発表を聞いた人たちからは、すぐに成果は出なくても10年かけてでもやる価値がある

と言われるなど、おおむね高い評価を得ています。我々としては、確かに力をつく一方大学合格を目指すという『現実』との間でジレンマを抱えています(梅本教頭)

現在、課題として残っているのは、「この取り組みをいかに全校に拡げていくか」と「大学入試への対応」だと、梅本教頭と室屋先生は口をそろえる。論理的思考力が重要であることは理解しても、各教員が長年にわたって培った授業スタイルを一朝一夕に変更するのは難しい。また地理歴史で一部行ったとはいえ、他教科との連携はこれからだ。大学入試も、センター試験英語では、PISA型読解力に通じる出題がされるようになってきたが、多くは、文法や英文和訳、和文

英訳の問題が主流である。

梅本教頭は「大学入試がどうあれ、社会に出れば英文の逐語訳ができて、筆者の言いたいことを理解できなければ、その英文を理解できていとは言えません。また、これからの社会ではインターネットの発達などにより、膨大な英文の情報の中から、早く、正確に必要な情報を読み取ることが求められますが、その際には本校の取り組みのようなスキルが必要だと思うのです。今後、本校の取り組みが、これからの社会に求められる英語力を育成する1つの指針になってくれればと考えています」としめくくった。

長崎日本大学中学・高等学校

◇所在地：854-0063 長崎県諫早市貝津町1555

◇創立：1967年(昭和42年)

◇学級編成(高校)：各学年10クラス(普通科9クラス デザイン美術科1クラス) 総生徒数1,345名(2009年4月現在)

◇特色

1967年、第5代日本大学総長・永田菊四郎博士の郷里である長崎県に、日本大学の付属高校として創立。校訓に「至誠・勤労・創造」を掲げ、祖国の繁栄と国際社会への貢献を志す人間の育成を目指している。高校の普通科は、国公立大学難関学部志望者を対象とする「アカデミーコースⅠ類」、国公立大学志望者を対象とする「アカデミーコースⅡ類」、基礎学力の充実を図り私立大学進学志望者を対象とする「プログレスコース」、さらに1991年に併設された中学校から一貫教育を行う「6年制コース」からなる。

◇卒業生の進路：(2009年3月卒業)

卒業生450名
合格者数：国立大55名、公立大21名、私立大216名、準大学10名、日本大学123名